







太閤記序



是國公秀吉。其微妙
 于武。受是操于松
 下。為潛謀。掌握宇內。
 及。乃。其。勢。而。旗。鼓。之。

留如。就席。駕風。雲
法。名。為。之。其。嵐。絨。骨
為。之。龍。伏。既。上。緊
王室。下。安。黎。庶。樓。臺
之。業。定。矣。乃。餘。勇。以

震。以。征。朝。解。遂。起。史
的。主。躬。工。失。措。也。唱
呼。可。謂。偉。矣。此。冊。也。
此。公。之。事。也。間。以。事
過。身。曰。隨。本。太。公。池。

意蓋在取史人觀
而後言之。及上揮
席不倚因舉字一二。
以冠其首云

享和至壬戌季春三月

廣福王府正堂

蘇滄大父宗陽撰



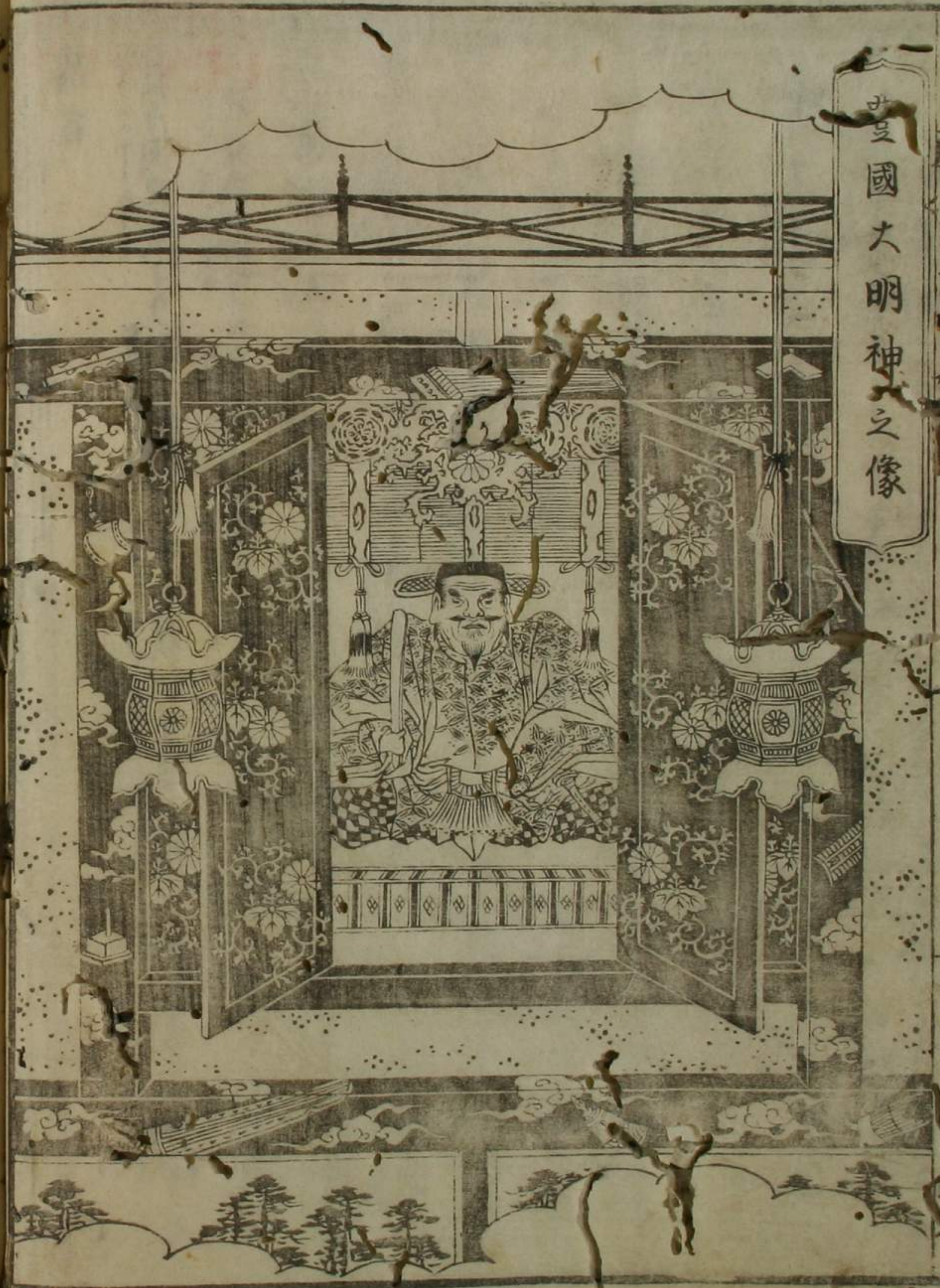


附言

豊を岡卑儀より犯て我國の中を横切し西と征し東と獵ふと南と略
 神東成功傳より九年より海内を主しつるも代り後代に豈に如き英傑を
 是し得んや小人の心とて是と云ふ其勿い頗恨しきふゆるのほし晩年
 兵と異國より強しといはるる謀略の妙はしつる外人の窺ひあはべき石に
 あらば統を況や今も其の俗小人よりはるの妙状と謙謙し大明神澤と
 してり我の貪兵を我の獨兵とて是等下に章と積習儒燕雀の心を以
 いては傑出英雄終はる大志と計知らんや其の信者と敵し信雄と逐次
 一家とて以まじ不仁の甚きかりと謗言とれは是又其の傑の心を以て
 其の傑も仁とて人と見れば天下人は其の周を孔子の聖人を以て云と見れば
 其の聖人も其の仁と見れば天下人は其の周を孔子の聖人を以て云と見れば

其の聖人も其の仁と見れば天下人は其の周を孔子の聖人を以て云と見れば

豊國大明神之像



繪本左圖記七篇惣目録

卷之三

又郎君生石川村話

又郎君名張りら申すて美人みおる圖

百地三右衛門後妻を娶る圖

又吾忍利其羅とのりり圖

石川又右衛門の盗賊話

悪業多し様里を衣く圖

若押但馬守逢次血雜話

泉傳系本若所餘八但馬守が依人と教圖

良頭口

又右邊門家持が屋敷の森へ後浩の圖

又右邊門家持が用舎と採る圖

又右邊門本持川と斬て流を晴る圖

二之卷

大盜隱而跡

又右邊門後不意をた圖

又右邊門仍巡見後話

又右邊門彌若の圖

又右邊門大畑の圖

又右邊門斬上後話

又右邊門若谷の圖

又右邊門理快とて福系を教る圖

田丸之家新造之話

又右邊門岩本の城の圖

又右邊門田丸の家を欺き其令と採る圖

田丸家の輝出る拷問の圖

根来寺定塔任次圖

又右邊門が属々多に方へ退教する圖

根来寺の定塔又次圖

三之卷

右邊門忍入内裏話

吉田山紅系將乃圖

中納言殿衣冠と刺し給ふ圖

作威喪邪を懲り圖

石原田生捕石川話

右邊自ら多押指と存給ふ圖

石原田石川と生捕る圖

三条川系京又右邊門話

龜田狐の山中よと菟紫槍六と捕る圖

田中兵又石川が忍と教とる圖

三条川系利場乃圖

秀次云謀叛露成話

秀次云戯とよ乃幼男女と抄教給ふ圖

三藏智田中兵部と瞞とる圖

口之卷

徳若院帝親皇親説圖内話

本村忠澄女阿波重之助談論の圖

秀次云登山する話

増田長盛途中より園白を

見る話(一)しむる圖

秀次云懐阿の奇を詠く孫の圖

中法六名漢女と詠る圖

伏見乃三後高野と詠る圖

秀次云以下生苦活

日圖

熊谷大膳が良字殉死せんとなす圖

畜生塚由来話

若達女房達引渡るるの圖

若達女房達執事乃の圖

女房達乃屍と埋む圖

又之卷

明孝宗滅之空山浦話

日圖

大地震法正登城乃圖

右岡怒大明西王書話

右岡大佛の崩しを蜀路の圖

明後伏見の城と列る圖

三成心謀を竹窟禪師と計る圖

右岡怒く妙長三成と妻孫の圖

明後所退之伏水話

凌君小西石田等が飛を院終る圖

る圖書と明の西使又揚る圖

明の群臣日本乃饒遠をえん

沈惟敬の偽と為る圖

蜜船漂着去沈國話

日圖

六之卷

日本軍兵渡海朝鮮話

沈心札と違て梁山の武と保んとる圖

朝鮮の古民妻子と推り山林と遊る圖

大明之援兵救朝鮮話

石星飲ま下る圖

沈惟敬中絶話

沈心が報書をかんく沈惟敬恐怖の圖

揚元沈惟敬を捕る圖

小西外長破元均話

朝鮮の水軍が軍元均運送を嘗ぬ

美女と飲とる圖

外長要附羅又冷じて及回と外とる圖

外長元均が軍船を破る圖

日本勢自海陸向南原話

元均日本の擒とめる圖

清正史王山の城と築と見る圖

七之卷

清正史石山城斬郭越話

白土霖城門を用き逃出る圖

郭越父子死の圖

魏東道妻子とちり節と死とる圖

日本勢攻南原城話

日圖

波介杜尾介人種洲とて多流と試る圖

南原屠城話

日圖

揚元い交李榮春の斬と劉之務の擒とる圖

金老義の水回と徳と分と見る圖

全州屠城話

日圖

黒多永政金氣鉞我解生話

山崎義去清とる名の圖

永政川と後して明兵と破る圖

八之卷

李察長大破河本勢話

日圖

波多野三河守と李察長と戦ふ圖

明大將軍那弼押寄蔚山話

那弼壇と藤之盟約を結ぶ圖

朝野芳長明軍と戦ふ圖

龜田大隅守と板て明兵と戦ふ圖

加茂清玄湯勇智輝明兵軍威話

明軍蔚山の城ををり取る圖

加茂清玄湯芳長と軍壽を謀る圖

蔚山合戦話

舟上六九郎明の志芳春

解生が船を折崩す圖

麻美茅圃と蔚山の擲子と戦ふ圖

蔚山合戦の圖

九之卷

加茂清玄入蔚山城話

日圖

信正大石坂將して明軍と戦ふ圖

朝鮮元帝を至言説清心話

蔚山の賊兵飢渴の圖

清心家臣松平次古橋平次と

傳せしく保て大明と乞圖

清心智術漢南人の火炮とのうら圖

明兵解圍退王城話

日圖

清心廣家漢南の大軍と破る圖

漢南勢図軍の圖

蔚山龍城洋器の圖

清心吉川廣家と馬印話

日圖

し才之卷

醍醐花見話

日圖 五葉

右岡怒の長史古秋話

安國寺清心の殿じて順天城を破る圖

明の劉綎吳京道をして外長と流す圖

劉綎孫伏兵を捕り長話

宥經山明の營中ときて外長密謀と告る圖

蒙中涌坂等水戰陳勝話

陳勝流丸中て明軍敗小るる圖

李常居智倭兵を退る圖

十一之卷

大明漢路大軍漢攻蔚山新塞話

志摩國忠中が操三新塞城の圖

第一元茅國志彼志摩國勢話

菟國志が後軍官外とて女を捕る圖

明の郭國安原修城の兵糧庫を焼く圖

四川城合戦話

吉慶明の役を罵く勇威を示し圖

倭勢兵部が補急得功を討圖

志摩國吉慶慶明軍話

日圖

國帝靈話

朝敵の人民餓死の圖

崇仁門外と廟の圖

巍くつり國帝半の圖

國帝靈の圖

十二之卷

渡君外状之話

石田三成金と多り名渡屋下向の圖

渡君後南と對り姿色の憔悴と驚く圖

僧日勝令龍の法と終る圖

渡君脱靴をとりまは圖

北政所外状の話

左衛門次婦御事言後樂を奏すの圖

総幽歌系妓の圖

北廳之像

風吹柳の圖

高臺寺乃圖

傘の亭乃圖

高基寺の什物政所御事道具の圖

洛東耳塚之由来

日圖

終日通終

繪本左圖記七篇卷之七

目錄

五郎吉生石川村話

五郎吉名張のち申して吳人よ登國

百地三ちま後妻を娶る國

文吉忠柳女雅を道る國

石川又右瀨門の次盜賊話

思堂を於里を哀く國

花押但馬守途盜賊話

泉信系本曹川弥八位馬守が依人と穀と國
 兼てが家臣の森へ後治の國
 又右邊門系神が用命と採る國
 又右邊門本神川と斬て治城晴辰國

繪本右圖記七篇卷之五

五郎若生石川村

夫を穂も寂々々音はし暮るいづるの處より日影人
 高きよいつに亦遠きよあつに都く只人かよあり人心一
 念を生どれを天地悉皆知亦若悪若むくひるんが乾坤
 一方に私あふん々り謀計をぬて富と得共曲ゆり
 貴を得るも唯一片の厚雲朝露乃中の系よあふるがて
 一豈承く保ら得んや文福の以系師大佛殿の門系り
 住居せし石川又右邊門が始末と刃切小河内國石川村の
 郷或文をまとい者乃子とて童名と又郎若と唱り其の
 生質よのつひるに七八歳より後明初よりして後秘の





五郎右衛門
名張の
あやし
いん
あ
海人園



五郎右
名張の
あやし
いん
あ
海人園

五郎右衛門
名張の
あやし
いん
あ
海人園

りまも虚言をいひて大人をたぶらば大膽不敵の曲者な
 まは成人の後まいうる者みろかりぬらんと両親のり
 一村の田安私をいひて思ふ事なり又即若十にやの時
 母と共い遊幸又又と病配し孤とありし時若しとも
 かもつぎいふく心乃伝みろるまひ大酒は仇道隣の女
 子と欲き犯し不敵の者と友と家業をも勤む一人の
 親母乃両親をかまうて絶しとろるも跡も果く捨り候と
 今も中く心はと執びく回畑るとも棄盡し十七歳
 の秋石川村の住居もぬりびく少のある人をか何ては作
 國へ抜きろるが名張の山中にて来船乃傳ふ條寛といふ
 異人に出合ひ其樹の物語を傳へぬ性質るればや親

心せはゆり大方方くは終ふ條寛が弟子とありて法術を
 學ぶ事なれて十八ヶ月元来藤利乃又即若一と伊て十と
 知りてくくを習ひ得る十九歳の雲師といふまを若げ
 月國支那郡百地三とまといふる々士乃家へ石川文吾と名
 を改めなるとありけり三とま年六十と余ありて妻とけ
 りい老の弟と死すん助けよとて後妻と求めけり
 花山院殿の御内は使まひて世に女の養をか式といふ者子細
 ありて時を乞ひとそふ嫁ありまよらせんこのかろるを
 けり者つとろひ終ふ三とまが後妻と定めぬけか式また
 二十又の妻秋を中にとりて殿とよ中なりと執りて是
 の巻くしとる辰の間よりやころび知はし梅の懸りるか

百地三才



百地三才
後妻と
娶る圖

百地三才



びく物うらつひうる瓦砧のやとくきひ花又戯る
 又仰る深山乃老猿うと見ゆる三まふは加合ハ
 ま坪るれは家へ入男女村中乃老若あまていこや
 あしんかくこそあううらんとかうりまとほして真一
 ぬ石川文吾家よ来りしとど免よりけ妻よ心をよせ
 くよ云するわに原素女あ性文吾が何中一きまふ
 歎うと終よ不義の妙ひよと刺へ三ちまが系へ
 後て嫁へあし金子八十又あまと改と出一夜まま
 文吾のうも作勢のう方へ落妙々あけるとぐう文吾心
 むふやうと我の是大あま方り豈一真婦のおま罪と天下
 又得べらんや色情の只我一時のたのろれのと女が改出せ
 金子とて都よ出て志をまふしと心と極め彼おひ得
 忠御隠身の法と妙のたれが腰下や文吾がわびた
 藝場をひて雪よそくぐおとくやうくと情と妙方を
 知つたの女大さよ肝と矢の魂と教へ身は冷汗と流
 一叫んととふふ物ひまらんともれが足るえ
 ぶよ方りてとと矢ひぬ文吾情よありてけありさまを
 見夢と教して呵と笑ひ都とさして妙妙々

石川又右衛門の盗賊

け以豊臣秀吉治東の地よ大佛殿と造立し終り
 たりを儀の髪花髪く益夜諸國の大石名切
 らん付来し牛馬の足音車の響きハ雷霆よいとしく

文吾
兔
女
雞
樹
園



真言七篇卷一

真言七篇卷一

室は殿下の御威勢いり方こそまうりたる石川文吾も
 け纏いしきをわしし海くう山しきりやあひ大佛殿
 の茶んちいとまき家成りくわ石川又右衛門と改名し室は
 信居しと何とてくる心もろくぬらと酒おそ言を
 吐て我傳りし浪人るれば日瓦相需るるひいそは
 道辺の何ぶともの葉は栄権六泉傳茶本曾川弥八松山
 大右即松波左九郎隆奥小三郎浮坂佐又七信持と藤藤
 山園八うんとお得ううとほび疾登のまうらうく或は酒
 吾あひい困甚或る法ありりりれ持たれ傳ひ妓女と何
 つめく真と傳り私私放蕩のうりぬしとまうりりり
 右衛門裏中乃令と出く其價とはくの人か是れ又酒の

財を方りとくく酒店ま揃り精貞乃益んゆを
 散ていりし若白しされば又右衛門の傳りし金まうりやく
 室のあり酒や病とれが盗む人情を始りて又は酒を
 後し或疾被悪堂とあつちと後したる我れは海
 等と朋友の交を踏ひ日毎の酒代は傳りし金銀を今
 を強盗り浪人の不他と守り我今より盗人ともうりし切
 らぬは名音暇ふる凡やまうりははじくり去て再び来る
 めるうと信教んでやたる我れとてけ心ありと人より来
 散て身を發せば又又ま何ぞ匿くして老と然んや足
 下計略はくが我れが魁首と仰ぎ承く樂く同ら

悪夢記



悪夢記
遊里と
家々園



とて一又右傍門大さふすろいひさだまき海をぐる
仁義をさる人久しく多と守るの恥ありと故人も云
ま抑令銀を蓄く天下の材あり一人の室ありは
るを富る者日くは業人羨しき者も日くは弱はけ
故に令銀の融通とるゆり多く弱者は多く後者もくは
猶も我今大資とありて強富乃若の令銀を掘り多
姓の中へまき散し天下の材宝と争ふ小抑均さば是も
又二ツの仁郷よりゆや後げふ於六小踊して以んで云石川
氏の如き一への然故長靴とらふもいふを及ばんねも
富附洛中外に於て強富乃町人推くるん今宵を袖
ゆに押入くるもふ得るん人たるや打交べきあふまはる

又右傍門制しては多ぐ不ね其のいじ町人百姓の終へ
令銀何程乃ゆらんやありは盗とんとうまは大名の海
きは押入棄置し令銀を町人百姓にまき散るこそ本屋
るれ今関白殿下の御附人恭押但馬守の権を應ずぬ
後人のより人よく御の不方り今宵謀計を以て但馬守を
抄びき出其法へ入る心乃まきと勤くはしそは繁葉松
二本若川弥八泉伴孫三人は夢をひそめて計を押しえそ
外の者どもはもそれくの指圖を返しきと夜の成の魁
用えしとくく個ひあひくは恭押が銀へ打交るるの室
は不敵乃あつまいかり

恭押但馬守達盜難

泉
侍
本
但馬守
八
川
人
殺
國



泉侍本但馬守八川人殺國

若し彼馬守長安と云ふ者も其としり勝右衛門と号して
秀吉公未だ下坂吉郎と申せし時より付従ひまつせ
志津が嶽の合戦は功なりてより此方の立身を以て彼馬
圍出石三万石成場り當時秀次公所治人のまをりて諸國
の大小名小名殺せしは頗る多し乃ち乃ちとうまり京都の屋
敷に松原を幸ありてみたりが彼石川が族も藤原宗隆
六草お織と大小立派に出立下郎七八人石を以て被若造が登
後へ来り石田治部少輔が家来礪六郎右衛門急乃俊者
かりと案用したりふけ時威勢肩を並り若るは石田三成が
俊若るは一万石調法のありまひるきやうにて用人恒造と
右衛門俊若のるふ法し清でねとと承り小彼俊若殿と

中今るは左衛門所儀の御用これありて彼馬守長安急な俊見
へ登りあふき有重人三成承り不方り秀吉公を来性急な
ゆせ後へは逃滞りて只今登城ありて終るべしとおのぶる
は右衛門怒まかこまり候て彼馬守と云ふくともせむ
彼馬守大まき不務き何々の御用と云心元はし何れも何れ
弛多しとんがけふるるに俊若を以て儀は俊見より
の用と云はし其の馬と云ふは承りて承りて承りて承りて
はして急ぎたるは何れにばきあさまなり秀の才魁なりり
是乃本林の何れなりて強押への中間を越と替りてて丁
引なりたるは承り付て承りて承りて承りて承りて承りて承り
兩人何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

先づ
希世の
名士
後援
之の
後援
之の
後援

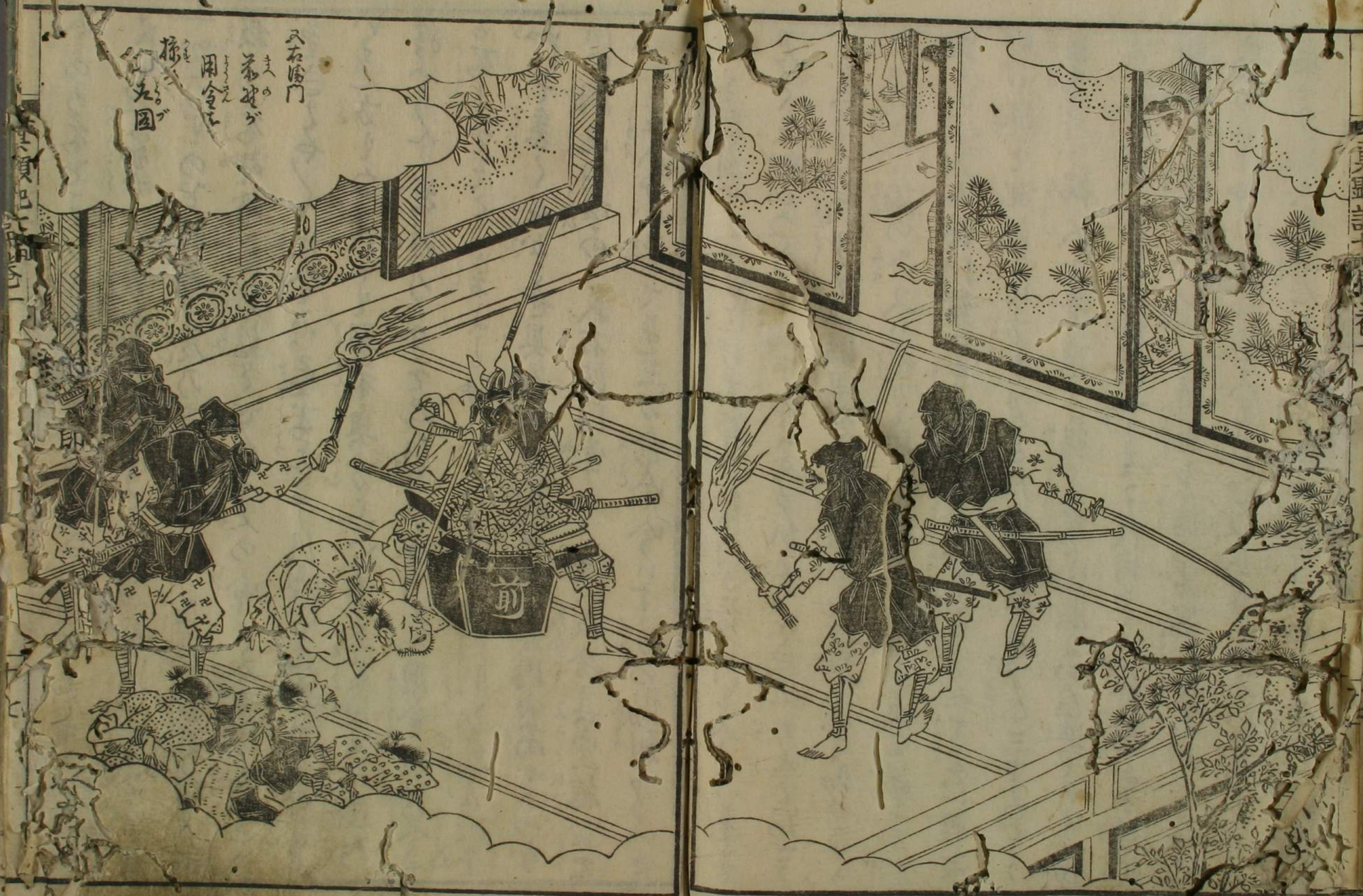


分れたその例とて息をたすけ休む跡八位とほしうり
 もくやくり休む大小と制をり捕申の御職をうづき宙を
 飛でるおちるを御職が登殿へ馳参りけりしとく門と叩き
 大書をして大書かたのぞくと叩きしを登殿の内へまきり参る
 先門内より何ゆゑと尋ねる殿掃屋の森の邊り過りまへそ
 ぐせ参りし殿をまきりと圓りする武者百騎をり槍ぶらぬ
 を催つて石火をまきり一言の論より及び五二五三は実業
 る疾中とついでる急のりるしに近習の土士抜合せ戦ふを
 ども我の討て我の陣と世に殿掃屋の槍をまてまへ参り
 ども敵の大勢よく参りまへ今いふとおれは我の友人
 飛よしの一飛馳参りて進進はるまへ所加勢めて槍を
 殿掃屋の御安否心りしとてまま彼場へ入参りまへと云い
 して人びとを参りし御職をの内へうげ入一参り馳参りしと云い

番武者佐右衛門大まきり参りし進進の者皆くお参り奉り
 次分をまきりとまきりしと叩きしを登殿の内へまきり参る
 どもは扱とてまきり御職をまきり参りし御職の者のおまへし
 お遠りし扱りお捨参べきまきり参りし御職の者のおまへし
 主人の御安否のまきり一家中用人諸士御進中参りしと云い
 まきり物の用はまきり参りし一人も参りし御職の者のおまへし
 を引つけ大書をして御職をまきり参りし御職の者のおまへし
 夕暮石川入参りし御職の御職をまきり参りし御職の者のおまへし
 引参りし御職の御職をまきり参りし御職の者のおまへし

右の敷蓋者又十餘りて... 内へ押入...
 持てし畜人の肝と... 何者ありて... 狼藉...
 終つる小... 撫六本... 川... 八... 扱討... 切殺...
 を内より... 又右... 門... 知して... 口... 門...
 一人も... 知る... 男... 女... 限... 向... 向... 捨...
 遮る者... 討... せよ... 心... 入... 入... 力... ぎ...
 せよと... 指揮... 下... 教... 多... の... 城... 堂... び... び... び...
 討... 中... は... 老... 人... 又... 小... の... 親... 人... の... 安... 心... せ...
 月... 者... に... 瓦... 破... り... せ... せ... せ... せ... せ...
 是... 南... 兵... 三... 宝... 曲... 物... 志... 志... 志... 志... 志...
 う... ろ... を... 冠... せ... せ... せ... せ... せ...

著... 踏... 付... て... ぐ... り... と... げ... ち... お... 又... 右... 門... が... 茶... 室... の... 上... へ... 登... 上... せ...
 月... 々... 々... 々... 々... 々... 々... 々... 々... 々... 々... 々...
 右... 門... の... 門... へ... は... 扱... 扱... を... 立... て... 固... 固... 固... 固... 固...
 う... り... び... 武... の... 扱... の... 下... へ... 又... 雑... 雑... 雑... 雑... 雑...
 地... へ... 又... 右... 門... 館... の... 中... 央... へ... 具... 足... 櫃... を... 居... せ... せ... せ... せ... せ...
 叩... け... 眼... を... 配... け... て... 右... 方... を... 見... せ... せ... せ... せ... せ...
 但... 馬... 守... が... 婦... 人... を... 守... 護... せ... せ... せ... せ... せ...
 ん... と... 身... 揃... へ... り... 又... 右... 門... 女... ども... は... 同... 様... 様... 様... 様... 様...
 を... 茶... 室... へ... 並... べ... ば... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍...
 大... の... 中... へ... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍...
 並... ぶ... る... 人... を... 助... け... る... 心... 持... ち... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍...



又右邊門
まの
茶碗が
用合
標
丸
印

東國
卷一

三頁
巳
月
一

令のありて... 男女老少の... 一切の... 殺す... 命を... 用金乃... 眼... 鼻... 耳...
令のありて... 男女老少の... 一切の... 殺す... 命を... 用金乃... 眼... 鼻... 耳...
令のありて... 男女老少の... 一切の... 殺す... 命を... 用金乃... 眼... 鼻... 耳...
令のありて... 男女老少の... 一切の... 殺す... 命を... 用金乃... 眼... 鼻... 耳...

亂陣を... 十人... 大勢... 附乃... 切て... 其の... 其の... 其の...
亂陣を... 十人... 大勢... 附乃... 切て... 其の... 其の... 其の...
亂陣を... 十人... 大勢... 附乃... 切て... 其の... 其の... 其の...
亂陣を... 十人... 大勢... 附乃... 切て... 其の... 其の... 其の...



又在唐門
新心
終
國

卷之二

大塚... 心志... 引...



繪本古圖記七篇卷之一終

